



新一年生入学 大学入門ゼミ始まる（1年次）



教育実習（3年次）



瀬戸の潮風に舞う

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター センターニュース

No.6



未来からの留学生（2年次）



教職実践演習（4年次）



2018年3月17日 最終講義にて

TOP NEWS 七條正典センター長 退任・退職のごあいさつ

香川大学教育学部「附属教育実践総合センター」に平成13年4月に着任した後、平成21年4月よりセンター長に就任し、平成27年4月「附属教職支援開発センター」に改組後も、引き続きセンター長を務めて参りました。このたび、センター長の職を辞するとともに、香川大学を退職することになりました。センター着任から17年間、センター長として9年間、大変お世話になりました。

この間、特に教育委員会（教育センター等を含む）や学校現場、附属学校園と学部との連携を中心に、共同研究、研修会の開催等に取り組んで参りました。また、改組後は実地教育を中心に、学生及び現職教員への支援のための取組を、学部の先生方（特に兼任の先生方や交流の先生方）や附属学校園の先生方と共に推進して参りました。お陰様で、その成果は、様々な報告書や教育実践総合研究、研修会に参加された方々からの声などに反映されているものと存じます。温かいご支援ご助力を賜りました関係各位に心より御礼申し上げます。

センター長の後任として、教育学部の松村雅文教授に引き継いでいただきます。今後とも、香川大学教育学部附属教職支援開発センターに対して、これまで以上にご支援賜りますようお願い申し上げます。

前・附属教職支援開発センター長 七條 正典

センター長あいさつ／平成30年度 附属教職支援開発センター 事業計画	2
【インタビュー】松村雅文新センター長に訊いてみた。	3
【特集】第18回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて	4
第18回 学部・附属学校園教員合同研究集会 研究グループ報告	5～9
第2期（10～3月）教育実践集中講座 実践報告	10
平成29年度 センター公開講演会 報告	10
附属学校園 この1年 ～2017～	11～14
平成29年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告	14
寄贈図書	15
教職支援開発センター活動報告／教育実践総合研究(第37・38号)原稿募集	16

センター長 あいさつ

関係各位におかれましては、お忙しい毎日をお過ごしのことと拝察いたします。日頃より本センターの事業にご協力・ご支援を賜り、心より感謝申し上げます。

さて本センターは、平成27年4月より、名称を香川大学教育学部附属教職支援開発センターと改め、①実地教育推進部門、②教職支援推進部門、③教育開発推進部門の3つの部門でそれぞれの事業を推進して参りました。詳しい内容につきましては、本センターホームページをご覧くださいければ幸いに存じます。

本センターは、平成30年4月よりセンター長として松村雅文が着任(併任)し、山岸知幸教授と松下幸司准教授の2名の専任教員、松井梨奈事務職員(兼務)、濱田雅子事務補佐員、松本愛事務補佐員の3名の事務担当が中心となって運営しております。また本年度、客員教員として、東条直樹客員教授(香川県教育委員会事務局義務教育課)、山田眞粧美客員教授(香川県教育センター)、岡 静子客員教授(元高松市小学校長)の3名の先生方をお迎えし、学生支援の充実を図っております。その他8名の兼任教員の応援をいただき、各種事業に取り組んでおります。さらに、これまで通り学部教員や附属学校園教員、香川県教育委員会・香川県教育センターの先生方等と協働し、具体的な取り組みを行って参ります。

本年度のセンター事業の運営・推進につきまして、これからも引き続きご協力・ご支援を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

本年度のセンター事業の運営・推進につきまして、これからも引き続きご協力・ご支援を賜りますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

附属教職支援開発センター長 松村雅文

平成30年度 附属教職支援開発センター 事業計画

1 実地教育に関する企画・運営；実地教育推進部門 <実地教育委員長(若井)、センター>

- (1)「教職概論」(「大学入門ゼミ」含む) (1年次) <教員養成課程主任(内藤)、松下>
- (2)「教育実践プレ演習」(2年次) <未来留担当(上野)、松下>
- (3)「教育実践演習」(事前事後指導) (3年次) <センター長、山岸・十河>
- (4)「教職実践演習」(4年次) <実地教育委員長(若井)、山岸・佐藤(盛)・十河>

2 教職支援に関する企画・運営；教職支援推進部門 <学生支援専門委員長(野崎)、センター>

- (1) 教職志望学生への支援活動
<学生支援専門委員長(野崎)、宮前(義)・植田・山本・佐藤(盛)・十河・大熊・片岡・宮前(淳)>
 - ・説明会、自主サークルへの支援、願書作成、卒業前直前対策実践講座等教授対応
 - ・進路に関する相談、教職に関わる悩み等相談活動
- (2) 現職教員への支援活動<センター長、山岸・宮前(義)・植田・山本・佐藤(盛)・十河・大熊・片岡・宮前(淳)>
 - ・指導力向上のための公開講演会等の開催
 - ・学習指導や生徒指導等を含む教育相談活動
- (3) 教育実践集中講座<松下、東条・山田・岡>

3 教育開発に関する企画・運営；教育開発推進部門 <附属担当副学部長(野崎)、センター>

- (1) 教材・資料の収集・管理・活用支援<事務・松下>
 - ・研究資料の収集・管理、教材・機器等の共同利用のための整備、ICT機器の活用支援、ソフト・ビデオの閲覧貸出等
- (2) 研究活動の報告等<松下・山岸>
 - ・「香川大学教育実践総合研究」の編集、教育実践集中講座資料集等
- (3) 広報活動<松下・事務>
 - ・ホームページ、センターニュース、パンフレット等
- (4) 関係機関との連携<附属担当副学部長(野崎)、センター長・山岸・松下>
 - ・関係機関との連携による共同研究、附属学校園等との共同研究等



松下幸司准教授
(専任教員)

山岸知幸教授
(専任教員)

4 その他

- (1) 学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導



松井梨奈 事務職員(兼務)



濱田雅子 事務補佐員

松本 愛 事務補佐員

松村雅文 新センター長に 訊いてみた。

太陽系の天体に例えるならば…

教職センターは 光を放ち続ける
“太陽” なのだろうか!?



聞き手：山岸知幸・松下幸司（教職センター専任教員）

——まず、私ども「教職センター」は、学部先生方から見たイメージとしては、いかがでしょうか。

松村：学部教員としては、実は、センターが見えていない・理解できていないというのが正直なところかもしれないと思います。例えば1年生の教職概論とか、3・4年生の教育実習事前・事後指導とか、4年生の教職実践演習なんかで活躍されているというイメージが強いんです。あと、センターで発行している教育実践総合研究や、センター主催で公開講演会を開催されているとか。いろんなところで、学生と関わり、学部教員や外部機関と連携して事業を進められているという印象です。ただ、本当にセンターのことが見えているか・理解できていくかと言われると、私自身、あまり自信がない、というところが本当のところなんです。そういった意味では、これからは私自身がパイプ役となって、教職センターの役割や働きについて、学部先生方や外部の方々にもお伝えしていく必要があるというふうに感じています。

山岸：以前、前任の七條センター長から伺った話では、一時はセンターがサロンのような雰囲気もあったそうです。そういう雰囲気がセンターにあってもいいのかなとも思います。気楽に集って学生のことや教員養成のことなど、大学教員が話し合える場所もあった方がいいのかなと思うところもあります。

——現在、全国的に教員養成系のセンターの改組などが進められています。改組や改変にあたって出ている文言として「研修機能の充実」ということがあるのですが、「養成機能」と「研修機能」のどちらに重点を置くべきだと、現時点ではお考えでしょうか。

松村：どっちがいいか、というか、何をやれば、香川大学教育学部としての強みが活かせるかということを考えていくことが、重要なんじゃないかと思うんですね。「どっちがいいか」と訊ねられても、すぐには誰も答えられない問いだと思います。香川大学教育学部としての強みを活かすことを考えて、どっちに重点を置くかというかを考える必要があるんじゃないかなと思います。

加えて、専任教員の先生方には、研究者としての自分の強みを生かせるセンターであってほしいとも思います。「それだとセンターが動かないんじゃないの?」と思われるかもしれないんですけど…でも、専任教員の先生方の専門性というか「強み」を、センターの仕事にも是非活かしていただいて、センター機能をより充実させていくという発想も、大事なのではないかなと思います。



——先生は理科の中でも特に天文をご専門になさっていますが、天文に興味を持たれるようになったきっかけは?

松村：まあ昔の話ですが、小学生の頃に見た星がきれいだったというのが、きっかけだったと思います。母の実家が広島県の山の中なんですけど、夏休みなどに見た星空が最初だったかと思います。理科好きだったので、本で星のことをいろいろ調べたりして。

それから、大学は理学部の天文学科の卒業なんですけど、卒業研究では、宇宙の塵による光の散乱とか、そのあたりの理論を研究していました。それとは別に、香川大学に着任する前に科学館のプラネタリウムで学芸員として仕事をしていたことがあって、そこから教育のことも意識するようになり、その後、香川大学で教員として勤めることになりました。

——松村先生のご専門の天文になぞらえると、教職センターは「何星」であるといいでしょうかね。「センターは北極星であるべきだ」とか…止まって、周りの動きを見ている方がいいのか、あるいは、周りで動き回っている方がいいのか、とか。

松村：北極星も数千年も経つと、地球の歳差運動で不動の星ではなくなる、という話もあります。何がいいのかなあ…。

——太陽系で言うと、やはりセンターだけに、太陽系の中心として光を放ち続ける“太陽”のようなセンターが望ましいのでしょうか。

松村：う～ん、困ったなあ…なんでしょうね…。現時点でのイメージでは“月”かな?と思います。ご存知のとおり、太陽と月とを比べると、月はネガティブなイメージがありますが、実は月で、満月の頃の数日はその他の時期に比べて非常に明るくなるんです。月表面の物質の構造により、満月の時期に、特に明るくなる性質があります。月も結構、自己主張しているんですよ。ですから、いろんな人の光を反射して輝く謙虚さを持ちつつ、学部や附属学校園や、関係する教育機関と協働し、強い輝きを放つのが、センターであるように思うんですね。それに、月による地球上の潮の満ち引きがなければ、生物は誕生しなかった!という説もあります。照らされて光っているだけでなく、周囲の変化や成果に、陰ながら大きな貢献を実はもたしている天体が、月と言えるかもしれません。

謙虚で「縁の下の手持ち」である月のような存在のセンターに、今年からは一緒に入らせていただいて、内部と外部という多様な観点から、これからのセンターの在り方についても、考えることができたいと思っています。

第18回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて



副学部長(学部附属連携担当) 野崎 武司

平成30年2月27日に、第18回学部・附属学校園教員合同研究集会が開催されました。総勢173名(学部教員68名、附属学校園教員105名)の参加で盛大に行われました。



いよいよ新学習指導要領の実施となります。社会に開かれた教育課程の実現に向けて「主体的・対話的で深い学び」は大きなキーワードです。小・中学校ばかりでなく、教員養成学部・大学院、そして附属学校園のあり方に関する議論(有識者会議)においても一つの論点になっています。本学部と附属学校園が「主体的・対話的で深い学び」をテーマとして掲げ、共同で研究集会を持つことは極めて重要な意義があります。

全体会の全体討議では、司会の松下幸司先生(教職センター)、提案者の松村雅文先生(学務委員長)から、まず大学教育・学部教育で展開されているアクティブ・ラーニングの紹介があり、附属学校園の取り組み事例もいくつか紹介されました。学部生代表の鉛口梢さんからは、学部教育・教育実習を体験してきた中での成果と課題などが話されました。



附属高松小学校の橘慎二郎先生の報告では、「主体的・対話的に深く学ぶのは子どもなのだ」という主張が印象的でした。形から入るのではなく子どもの学びをしっかりと読み取ること(子ども理解)の重要性が語られたと思います。附属坂出中学校の山城貴彦先生の報告では「大学生が教え込みの授業に慣らされている」「対話を中心とした授業のイメージが持てていない」という主張が印象的でした。

学生の授業観を深めていくためにも、例えば「志向・共感・協同、有用」であるとか、「全員を学びに引き込む問い」「全員が対話に参加できる問い」「学びをさらに深めるための問い」などの考え方とリンクした大学における教員養成の取り組みが広がるべきではないかと感じました。大学教育として教員養成の「実感を得られる学び」、「自分のものにできる学び」を如何に構築していくべきか、極めて難しい問題ですが、果敢に挑戦していくべき課題であるとも思います。



後半の個別・ポスター発表では、20件の学部・附属の共同研究の成果発表があり、熱心な意見交換がなされました。学部と附属がしっかり繋がって質の高い教員養成を実現していくことを願っています。



1 異学年集団における教師の自律性支援

岡田 涼、附属高松小

附属高松小学校では、今年度より教育課程特例校の指定を受け、「創造活動」を核とする教育課程の開発と効果検証に取り組んでいる。本研究では、異学年集団で行われる縦割り創造活動での教師の自律性支援について検討した。縦割り創造活動の話合い場面を観察し、教師の発話を分類した。その結果、縦割り学級において、児童の視点を代弁し、興味を喚起する発話が、多くの教師に共通してみられた。一方で、個々の教師に特有な支援のスタイルや年度内での支援スタイルの変化もみられた。以上の結果から、教師は多様な支援を行うことによって、児童の積極的な活動を支えるとともに、自身の支援スタイルについても変化させていることが示唆された。



2 小学校・中学校における読むこと・書くことの習得が困難な児童・生徒に対する学習支援の方法についての研究—語彙指導の方法の開発—

佐藤明宏、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、附属坂出中、附属特別支援

読むこと・書くことの言語力は国語科のみならず、全ての教科の基礎学力となる。そういう子どもたちに、これらの学習基礎力となる読むこと・書くことの学力を保障するための指導方法を開発していこうと考え、これまで継続研究に取り組んできた。

今年は、語彙指導に焦点化して研究を進めてきた。各語彙を体系的に関連づけながら量的に増やすということと、コンテキストの中での語句の深い理解により質的向上を図るという二つの側面から新しい語彙指導の方法の研究開発を行ってきた。



3 社会科教育におけるアクティブラーニング型授業開発に関する研究

鈴木正行、高倉良一、守田逸人、附属高松中、附属坂出中

合同研究集会では、「真正の学び」の観点から、以下の授業実践を分析・考察した成果を発表した。

- (A) 全学共通科目主題B「日本の歴史と現代社会」において、自民党の平成24年版憲法改正案を用いた模擬国民投票を行い、改正案の意図や影響、中学校での応用可能性について検討した。(鈴木正行)
- (B) 歴史単元「江戸時代初期の土地開発」を開発し、ため池の築造に貢献した人物が高松藩により追放された理由について、3D地形図や藩財政等をもとに推論する授業実践の報告を行った。(高松中：池田 良)
- (C) 地理単元「香川人口増大作戦」を開発し、生活の利便性や防災等の視点から地形図や主題図を読み解き、丸亀市に転入する家族に居住地区を紹介することを想定したシミュレーション型授業実践の報告を行った。(坂出中：山城貴彦)

※写真は、ため池の堤防をつき固めるための「亀の子石」を持ち上げて、重さを体感している様子。



4 数学科授業研究における順序思考・俯瞰思考の役割

佐竹郁夫、附属坂出中

算数、数学学習における順序思考、俯瞰思考と、特別支援教育における同時処理、継次処理との類似点、相違点について議論を深めることができた。特に、児童、生徒の視点の移動について、見る対象の移動と見る側の視点の移動についての考察などについて意見交換でき、視点の移動を可能にするための方法など、共有できる部分が多いと感じられた。また、今回の共同研究で行った調査問題のねらいは、普段の図形学習において良い向き合い方をしているかどうか、を測ることであり、高松小学校、高松中学校の教員の方々から、そのねらいや調査結果から見られた（通常の成績からは見えてこない）傾向について積極的な質問をいただいた。また、坂出中学校での渡辺先生、山田先生の研究授業では、今後小中学校でそのウエイトが大きくなるデータの活用や統計的な考え方について、身近な題材を用いつつも発展性のある内容を扱っており、その授業構想について、広く興味をもたれていろいろと質問が寄せられた。



5 新たな視点による中学校音楽科鑑賞領域における音楽の教材化に関する実践的研究

岡田知也、附属坂出中

音楽科の鑑賞の授業は、ともすれば、子どもは「受け身」で「孤独」な、そして教師は「知識を教えようとする」、非アクティブ・ラーニングの授業に陥ってしまう。音楽に精通した教師が「この音楽は〇〇の様子を表している」とか「この音色は〇〇という楽器の音」などと、知識の引き出しを次々と自ら開けていくことで興味・関心を引くことはできると思うが、「教科書にある楽曲を教える」のではなく「楽曲で教える」のが音楽の授業であるのだから。

さて、今回設定した「新たな視点」とは、「その作品をリアルタイムで聴いたのはどのような人々か」「その聴衆に向けて作曲者はどのように作品をアピールしたのか」という視点である。その視点に基づき二人の作曲者による作品を鑑賞する授業を実践した。授業後の感想では、多くの生徒が、聴衆を意識すると音楽の特徴の違いをはっきり知覚できるようになったことや、聴衆を意識して作曲されていることに対して考えを深めたことについて振り返りを述べていた。



6 科学的探究能力を伸ばすための指導と評価の研究

笠 順平、附属高松中、附属坂出中

本プロジェクトは、理科における「探究活動」や「探究的な学習」というものをどのように捉え、生徒の科学的な探究能力をどのように伸ばすかという課題について、理科新学習指導要領における「探究」への言及を相対化しながら、多面的かつ実践的に検討していくことを目指している。当日のポスター発表では、本プロジェクト全体の趣旨に加えて、予稿集に掲載した（１）附属坂出中における「生徒の探究活動を核とする新しい授業プラン」、（２）附属高松中における実験ノート、（３）香川大における「科学的な説明の能力を育成する（小中高用）授業プラン」の試行に加えて、（４）附属坂出中での科学と社会が関わる問題についての授業プランの報告も行った。また、附属高松中における実験ノートの実物を展示した。その結果、両附属小・両附属中・附属特別支援学校の多くの理科関係教員が相互に学び、日頃の問題意識を交流し合う場となった。また発表者にとりよいフィードバックを得る機会となった。



7 造形的な表現場面における遊びと環境のかかわり

吉川暢子、附属幼稚園

本研究では附属幼稚園内の園庭で見られた遊びのありようを調査し、子どもが環境とどのようにかかわり、どのような遊びを行っているのかについて環境図記録を用いて明らかにした。そこでは、園庭の中で子どもが遊具や自然物といった「物的環境」に自らかかわり遊びを生み出していた。それらのかかわりには「人的環境」である教師や他の遊びをしている子どもの影響も見られた。ことから子どもの遊びは環境に影響を受けるといえる。環境は、子どもの遊びを引き出しその経験を左右するため、環境構成は重要な意味を持つ。この環境は存在すれば成り立つものではなく、それとどのようにかかわるかによって、表現や遊びが生まれるかとなるのである。調査からは環境に子どもが自らかかわり、それを活用しているかをみることで、子どもの表現行為が生まれる過程についての示唆を得た。

今度も継続して、子どもが遊びの中で環境とかかわりながら、自己の表現を生み出していく過程を見ていくことにする。



8 中学校技術におけるIoTプログラミング学習システムの試作

～新学習指導要領に向けて～

宮崎英一、附属高松中、附属坂出中

現在、文部科学省の審議会において2020年度を目途に小学校におけるプログラミング教育の必修化が決定された。しかし、ここで問題になるのが、教育現場におけるプログラミング学習環境の構築である。文部科学省の審議答申においては、教科としてのプログラミング教育という科目を増やさず、既存の科目の利用を考えている。このため、プログラミング教育の専門性を有した教員やその環境が存在しない状態で教育を行うには、学校現場の負担が大きいと考えられる。また、現在のコンピュータ環境はIoTとして、我々の日常生活と密接に関連している。そこで本研究では、初学者向けに多くの教育現場で実践利用の高い

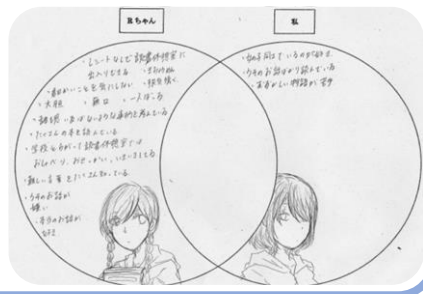
「Scratch」をもとに、日常生活に対応した様々なセンサを簡単に制御可能なIoTを活かしたコンピューティング教材の開発を目指すものである。



9 思考ツールを活用した国語科「深い学び」の研究

山本茂喜、附属坂出中

今年度は、思考ツールの内、特にマトリクスベン図を活用した国語学習の方法について共同研究を行った。今回の実践では、特に「深い学び」としての批評文の作成における思考ツールの有効性を明らかにすることが出来た。また、これまでの成果をもとに、このたび新指導要領に対応した『思考ツールで国語の「深い学び」』（山本茂喜編著・東洋館出版社）を上梓することができた。共同研究の成果としては三冊目の出版となる。これまでのご支援に深く感謝する次第である。来年度以降もさらに共同研究を深化させるとともに、新たな研究書を出版したいと考えている。



10 学級経営と体育学習の相互連関に関する研究

野崎武司、附属高松小

本年度は、附属高松小学校の大西美輪先生と共同研究をさせていただいた。大西先生のクラスは実にのびのびと探究的な活動を展開する。その秘密に迫ろうという試みだった。「気づき・考え・行動」のキャッチフレーズのように、子どもの主体的な「気づき」を育み、子どもの感じていることにしっかり寄り添うことを大切にしていた。それでも「出るべきところでは出る」という教師の判断、「出るか／待つか」の判断が、学級を支えていると改めて気づかされた。附属高松小学校の授業研究は、子どもの認識の大きな転換点で教師が「出る」という視角を持っている。それゆえ「出る」タイミングについては大いに議論されるところらしい。そうした教師の鍛錬は、学級経営や生徒指導上の「出る」場面にも生きていと感じられた。様々なアンテナで子どもを理解しようとし、クラスの子どもたちの認識を大きく変えるべき時を捉えて、「出る」という大西先生の強さが、クラスの魅力を生み出していると感じられた。



11 住文化理解の促進をめざし、ESDを意識した家庭科授業づくりに関する研究

妹尾理子、附属坂出中

共同研究として、「高齢期の生活」と「和室と洋室の長所短所などの住文化」に関する学習を関連付けて学ぶ授業と教材を開発したので発表会場にも一部の教材を持参した。香川の職人さんに作っていただいた本物の畳（ミニサイズ）や床材、障子と襖の引き戸などである。畳の内部がわらであること、近年では木質素材のものも多いこと、和紙素材の畳も人気であることなども紹介した。実物教材は中学生にとって新鮮だったようで、座ったり、はねたり、転んでみたりしていた。和室の無い家が増えている現在、実際に触れる学習は有効で、教室での体験の結果、転んでも痛くない、エコな素材でもあるなどの気づきが生まれていた。祖父母が愛着を持って手入れして使い続けている話や、自分が調べたことなどと共に活発な意見交換もなされ、通常なら写真などで済ませてしまいがちな住文化の学習も、観点を明確にして実物を示す事で、主体的な学びや対話を引き出す興味深いものとなることが実感できた。



12 カンボジア来日研修における附属校での保健学習授業参観における共通評価項目の作成と分析

宮本賢作、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、附属坂出中

香川大学は、平成28年度よりJICA草の根技術協力事業（地域活性化特別枠）の採択を受け、同国同郡の32の小学校において保健室、手洗い場、トイレ等の整備並びに衛生授業等の支援を開始した。その活動のひとつとして平成29年10月にカンボジアから来日研修で現地小学校教諭等が附属校で見学を実施した。本研究では、来日したカンボジア教諭が回答する、附属4校における授業参観での共通評価項目を作成・分析することを目的として実施した。現地での健康課題としては青少年期および成人期における性感染症（エイズ）予防、交通安全が最重要項目としてあげられている一方、小学生期における身の回りの衛生的な基本的生活習慣の確立がその環境整備も含めて重要視されている。今回、来日研修において保健授業を参観することにより、自国の現状と日本式保健授業の導入の可能性について、カンボジア教諭に分析してもらい、今後のカンボジアでの保健・衛生授業の展開について模索するものにした。



13 ICTを活用したアクティブ・ラーニング教材開発

高木由美子、附属坂出中

各都道府県の公立校の学校ICT機器の導入状況について例示し、試験的に導入したi-padの附属坂出中学校での実践事例について報告した。

新学習指導要領で求められているICTの特性・強みを生かした学び等の機会を確実に確保する観点から、「教育ICT環境整備指針」を策定するにあたっては、学校におけるICT環境整備のあるべき姿の提示はもとより、調達する教育委員会の担当者に対しても適切な情報を提供することが可能となるよう、世界的な教育市場の動向等も参考にし、サポート体制も含めた学習者用コンピュータその他のICT機器等の効率的な調達の在り方等について更に検証を行う必要がある。さらに、学校におけるICT環境整備には、関係機関による学校用ICT機器等の低価格化に向けた具体的な検討、利活用における教員側へのサポート、特に、実際に授業にICTを導入する教員がメリットを実感できるようなサポート体制の構築を早急に進める必要がある。

保体

【単元】器械運動(マット)、剣道

内容：各技の練習中に連続撮影。改善点などを話し合う。
4人組の演舞を動画撮影。動きの確認や評価に活用

【単元】球技

(サッカー/フットサル)

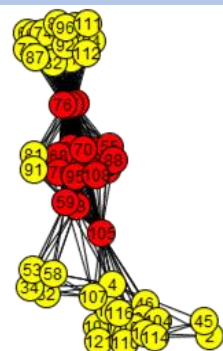
内容：ゲームの様子を撮影して、自分たちのチームの課題確認や対戦チームの分析や振り返りの場面で活用



14 十進位取り記数法のよさの感得を目指したデザイン研究

松島 充、附属高松小

本研究の目的は、すべての子どもたちに十進位取り記数法のよさを感じさせるための具体的な授業のデザイン原則の開発である。開発にはデザイン研究の手法を用いた。本稿では、位取りの原理に関するよさの感得に焦点を絞り授業実践を行った。授業実践前後のプレ・ポストアンケートから、よさが比較的感得できたグループとそうでないグループを特定し、2種のグループを対比考察した。考察では、発話記録から2種のグループ間の差を見出した。考察は2種類行った。数学の内容を深めるための対話に関する考察と、それを支える対話の在り方に関する考察である。前者では、本時の学習を深めるためのキーワードの出現回数の差を考察した。後者では、発話の種類を量的に数え、その差から対話の在り方を考察した。2種のグループの対話の様相の違いの要因をデザイン原則として6点抽出した。3点は数学の内容を深めるための原則であり、もう3点是对話の在り方に関する原則であった。



15 知的障害特別支援学校小学部における等分理解を促す「算数科」の授業開発

恵羅修吉、附属特別支援

これまで概数理解が難しいと考えられてきた知的障害のある児童であっても、概数能力を使用する機会を設定すれば、能力の向上と活用を促すことは可能である。本実践では、本校小学部児童を対象として、大まかに量を捉える能力に着目し、いろいろな物(今回は連続量を取り上げた)を「半分に分ける」こと、すなわち「等分」の理解を促すことを目標として単元を開発した。連続量を分ける活動は、日常生活のなかで頻繁に生じるものであり、そのことがより適切に実行できることはいろいろな場面で作業効率の向上につながる。小学部段階からその能力の向上と活用を意識した授業を導入することで、中学部や高等部の数学教育の基盤となることが期待させる。合同研究集会の場では、このような点について実りある情報交換をすることができた。



16 プラネタリウムソフトを用いた天文教育手法の開発

松村雅文、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、附属坂出中

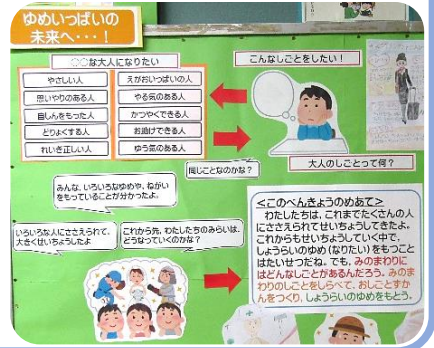
天文分野は難しいとされ、理科教員からも敬遠されがちです。これは今に始まったことではなく、文献を調べると1960年代くらいからこのような意識が持たれていることが判ります。では、他と比べて、天文のどのような部分が難しいのだろうか改めて考えると、必ずしも明らかではないことに思い至ります。一方、近年のICTの発展は目覚ましく、天文教育の世界でも色々なハードやソフトの利用が可能になってきました。これを放っておく手はありません！ 国立天文台が開発したMitakaというパソコンソフトはその一つであり、これを用いて、天文は難しいという「歴史的な難問」を解き、新しい天文教育の道を開くことができるのではないかと考えました。そこで、学校現場でどうMitakaを使えば効果的なのかを研究しようと附属の先生方に声をかけたところ、思ったより多くの先生方からご返事をいただきました。研究はまだ進行中です。写真は、Mitakaを用いた3D投影システムです。これも用いて研究を進めていきます。



17 生活科と他教科との接続・発展を図る授業の開発に関する研究

伊藤裕康、附属高松小

平成20年度学習指導要領生活では、「身近な人々とかかわる」ことが強調され、気づきを深める方向性が示された。また、平成29年告示の小学校学習指導要領生活では、「他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにする」ことが加わり、解説では、「社会科や理科、総合的な学習の時間をはじめとする中学年の各教科等への接続を明確にすること。単に中学年の学習内容の前倒しにならないよう留意しつつ、育成を目指す資質・能力や『見方・考え方』のつながりを検討することが必要である。」とされた。そこで、キャリア教育で育成する資質は、生活科の教科の本質と深く結びつくことから、社会科との接続を意識して、キャリア教育の視点を組み込んだ生活科授業研究を行ない、その実際として、2年生生活科の轟実践「こんなことができる人になりたい!」を提示した。



18 「遊びの質」の相互理解を促す保育アセスメントモデルの開発・検証

松本博雄、附属幼稚園

本研究グループでは、平成26年度より子どもを対象にしたクラスだより(「〇〇くみしんぶん」)を作成し、子どもたちにフィードバックするアクションリサーチを継続してきた。その結果、本アセスメントは子どもの学びを促すとともに、保育実践の質の向上につながることが明らかになった。そこで、今年度は昨年度に引き続き、「しんぶん」を保護者に公開する取り組みを実施し、保護者に対する説明ツールとしての効果と課題を検証した。保護者へのアンケート調査により、「しんぶん」の定期的な公開が、保護者の保育実践への関心を高めているとともに、特に、入園初年度の3歳児クラスにおいては、保護者同士や担任保育者とのコミュニケーションを促す効果的な媒体として機能しうることが示唆された。今後は、「しんぶん」の保育者間における実践を共有するツールとしての機能や、また、卒園後の子どもたちの自己形成への影響等について研究を進めていきたいと考えている。(写真: 閲覧中の保育者と子ども(3歳児クラス))



19 透過型HMDを利用した教材呈示システムの開発

黒田 勉、附属高松中、附属坂出中

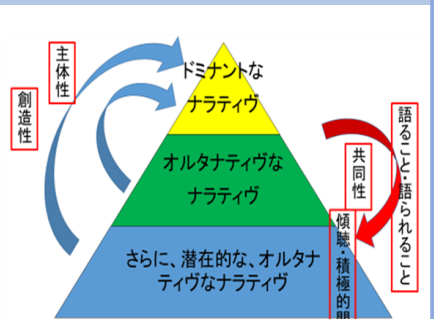
VR、ARの進展に伴いヘッドマウントディスプレイ(以下HMD)の低価格化や軽量化が進められ、眼鏡程度の大きさ・重さの透過型HMDが実用化されている。特に透過型HMDは、目の前を見ながら画面を呈示することが可能で、実作業を行うと同時に、師範の動画像を見ることができるといった利点がある。本研究では、この透過型HMDを用いた教材呈示用ビデオ教材の作成を行うと共に、問題点の洗い出し、評価方法の考察、ならびに教材コンテンツ提案を行った。実際にHMDを装着し、コンテンツの体験をしてもらった。また、全天球カメラを用いたデモンストレーションを実施した。



20 「物語り(ナラティブ)」の観点からみた教育実践の理解とナラティブ・エデュケーションの開発—教育実践の質的分析とダイアログ(対話)を通しての展開—

竹森元彦、附属坂出中

本研究では、教育現場に物語りを活かす「ナラティブ・エデュケーション」、つまり、「物語り(ナラティブ)」を教育実践の中核に据えた、生徒の主体性や対話力が向上する理論的な枠組みについて実践的に検討した。生徒のナラティブの生成には、教師自身が授業の捉え方、子どもをどのように育てたいのかという教師自身のナラティブの持ち方、生徒へのナラティブに着目した「眼差し」等、教師観、生徒観、教育観が大きく関係する。そこで3名の教員へそれらのインタビューを行った。「座談会」(ダイアログ)の開催、『ナラティブ・エデュケーション研究会』を立ち上げ、2年間の研究成果として『ナラティブ・エデュケーションへの扉を拓く—物語りを生かし、個と集団をつなぎ、主体性と協同性を統合する「生きること」と「学ぶこと」をつなぐ授業実践—」(2019)を発刊する。昨年度は『ナラティブ・エデュケーション入門』(2018)を発刊。



平成30年度教職センター事業計画「インタビュ」
新センター長に訊いてみた。
【特集】
第18回 学部・附属学校園
教員合同研究会を終えて
研究グループ報告 ①④
研究グループ報告 ⑤⑫
研究グループ報告 ⑬⑯②
第2期教育実践集中講座 報告
平成29年度公開講演会 報告
附属学校園 この1年2017
(附属幼・附属幼高松園舎)
附属学校園 この1年2017
(附属高松小・附属坂出中)
平成29年度
センター協議会 報告
寄贈図書

先生になろう！ ～「夢」と「笑顔」のある教職へ～

附属教職支援開発センター客員教授 大山 修・東条 直樹・岡 静子

[第1回] 10月20日(金) 教職実践演習 「いじめと体罰」(大山) 「教員としての倫理観」(岡) [第2回] 11月9日(木) 生徒指導論A 「生徒指導ケーススタディ」(東条) [第3回] 11月13日(月) 教職概論(イ) 「教職の魅力 教職とは」(大山) [第4回] 11月13日(月) 学級経営論(ロ) 「学級で育つ子どもたちのために」(岡) [第5回] 11月15日(水) 教育実践演習A・B 「教育実習を振り返って」(東条・岡) [第6回] 11月20日(月) 教職概論(イ) 「魅力ある教師をめざして」(岡)	[第7回] 11月24日(金) 教職実践演習 「はばたけ若き力を生かして ～4月からの心がまえ～」(大山・岡) [第8回] 12月7日(木) 生徒指導論A 「小学校における生徒指導の実践問題」(岡) [第9回] 12月11日(月) 教職概論(イ) 「授業とは 保育とは」(東条) [第10回] 12月13日(水) 人権教育 「学校教育における人権教育 小学校での取組事例に学ぶ」(岡) [第11回] 1月22日(月) 道德教育論(ロ) 「子どもの心を耕す道德の授業」(大山)
--	--

第2期は全11回の集中講座を行いました。

講座を進める中で、自分の講義の進め方を反省することが多々ありました。例えば、一方的な説明を続けてしまった結果、ふと気が付くと、必死に目を開いて眠気と戦いつつ講義を聞こうとする受講生の姿が目立ち、聞く人の立場に立って考えることの重要性を痛感したことがありました。

受講生から学ぶこと、考えさせられることもたくさんありました。特に印象に残っていることは、香川大学の学生が「学び合う集団であった」ということです。教育実習の報告・意見交流の場では、互いに報告を行う中で、議論が起きました。双方の意見は、対立しているように見えて、どちらもよりよい教育の在り方について前向きな考えでした。相手の考えにしっかりと耳を傾けてそれを受け入れつつ、適切な言語を用いて自分の考えを表現し合う二人、また、その様子をただ見ているだけではなく、そのやり取りに参加していこうとする学生。そのような様子を見ながら、香川大学の育成プログラムと先生方の日々の指導がしっかりと実を結んでいることを実感するとともに、このような学生が教職に就いてくれたら、学校でどんな困難なことが起きても同僚と協働的に対応してくれるであろうと思い、心強さを感じました。

教師という仕事には、苦勞や困難もありますが、その向こうには必ず子どもたちの「夢」と「笑顔」が待っています。受講生が教職に「夢」を感じ、「笑顔」で進んでくれることを願っています。

平成29年度 センター公開講演会 報告

小学校英語教育の早期化・教科化に向けて

— 今できること、考えるべきこと —

講師：宮城教育大学教育学部准教授 鈴木 渉 先生

平成29年8月26日(土)、「小学校英語教育の早期化・教科化に向けて—今できること、考えるべきこと—」とのテーマのもと、宮城教育大学教育学部准教授 鈴木 渉(わたる)先生に基調講演をいただき、続いて、鈴木先生とともに、高松市立川添小学校校長 高松憲子 先生、香川県教育センター主任指導主事 山下美紀 先生、3名のパネリストの先生方をお迎えし、70余名の参加者を得て、公開講演会が開催された。冒頭、七條正典 教職支援開発センター長が開会のことばを述べ、共催をいただいている香川大学教育学部同窓会松楠会の会長 小比賀俊彦 氏よりごあいさつを賜った。

鈴木先生の基調講演では、外国語活動、外国語科の授業において、子どもたちに英文を発話することを性急に求めず、言語習得の基本である「聞くこと」の活動にじっくり取り組ませることの重要性や、必然性のあることばのやり取りを工夫したコミュニケーション活動の具体例を示していただきながら、今回の学習指導要領の改訂の趣旨、基本的な考え方を分かりやすくご説明いただいた。続いて、高松先生からは、学校管理職、校長としてご自身のリーダーシップのもと外国語活動に学校全体で取り組んでいる具体をご紹介いただき、また、山下先生からは、教育センターの小学校英語活動にかかわる研究、研修事業、支援事業についてご説明いただいた。

その後、休憩時間に回収した質問紙による質問は約20余りに及び、参観の皆様の本日の講演会の主題に対する関心や問題意識の高さが明らかとなった。それらの質問に回答する過程で、鈴木先生からは、文部科学省が今回の改訂で、早期化・教科化に向けて先生方の負担感を少しでも軽くするため、指導資料や研修事業の整備に余念のないこと、特に、指導資料について、教材はもとよりその活用の仕方についても詳しい資料を作成中であることなどが紹介された。

最後に、共催の香川県教育センター所長 藤井浩史 先生に閉会のことばをいただいた。先生には、「安心」をキーワードに、基調講演、シンポジウムの内容を簡潔に、分かりやすく総括していただき、最後に、小学校英語指導の充実のため、2020年の完全実施に向けて、学校、行政、大学が今回の講演会で確認された内容を踏まえつつ、連携、協力していくことの必要性を確かめて講演会はお開きとなった。今回の公開講演会の実現のためにご協力いただいた関係各位にこの場を借りて感謝申し上げたい。(文責：齋藤嘉則)



香川大学教育学部の各附属学校園より、2017年度の実践研究の取り組みについて ご報告いただきます。

附属幼稚園

第62回 附属幼稚園研究大会 報告

研究主題 ～つながる～ 子どもたちの生活を支えるⅢ

1 研究会の概要

1月26日（金）に「つながる子どもたちの生活を支えるⅢ」をテーマに、子どもの体験と体験のつながりについて保育実践研究の発表をした。県内外からの参会者約270名と共に、分科会での協議、鯨岡峻先生の講話などを通して学びの機会となった。

2 研究主題について

子どもたちの生活を支えることを一人一人の子どもの育ちが充実することと捉え、一つ一つの体験や、体験と体験がつながる過程を丁寧に見取ることを研究の柱とした。体験がつながる過程において、子どもがどのようにかわりを広げ、どう感じているのかを探り、それらを支える保育者の援助について見出した。



友だちと「～しよう」と
考えを出し合いながら



友だちの「～したい」
気持ちを感じながら

3 研究の成果・課題

「～したい」「こうありたい」という思いがあってこそ、多様な体験へつながる。それらがまた次の「～したい」「こうありたい」という思いを生み、次の体験へとつながる。また、「～したい」「こうありたい」という思いをより強くしたり高めたりしながら、自分を向上させようと内面が変容していく。このような体験のつながりが複雑に絡まり合う育ちの過程を見出すことができた。さらに、育ちの過程の質を高める保育者の心もち（子どもを見ようとする心もち、子どもをありのままを受け止める心もち、子どもの内面を考える心もち）の重要性を再認識することができた。



遊びながら
「～なりたい」思いが生まれてくる

附属幼稚園 高松園舎

初等教育研究発表会 報告

2月1、2日に開催した「初等教育研究発表会」には全国から多くの方々にご参会いただき、盛会裏のうちに終了することができました。学部の方には、ご指導・ご助言をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。また、学生の皆さんにも協力していただきました。ありがとうございました。



幼小交流活動「いっしょにつくろう！いっしょにあそぼう！」

今年度から新テーマ「主体的・対話的で深い学びの生まれる保育」のもと、対話の生まれる環境や教師の援助に視点をあてて事例研究をすすめてきました。研究会当日は、一伝えあって つながって—をテーマに4・5歳児の保育および5歳児と1年生の幼小交流活動「いっしょにつくろう！いっしょにあそぼう！」を公開しましたが、県内外から多数の参加者がありました。主体的で対話の生まれる教師の援助についてグループ討議なども交え議論し、参会者からも活発な意見がよせられました。講演では子どもとことば研究会 今井和子先生が「主体的・対話的保育を目指し—遊びの質を高める」のテーマで当日の保育ビデオを交えながらお話いただき参会者からも好評でした。

附属幼稚園高松園舎では、教育の今日的課題を見据えつつ、明日の教育の在り方を実践的視点から検討し研究を続けると共に、実践を通して提案していきたいと考えています。今後とも、ご助言・ご支援の程、よろしくお願いいたします。

センター長あいさつ
平成30年度教職センター事業計画「インタビュ」
新センター長に訊いてみた。
【特集】
第18回 学部・附属学校園
教員合同研究会を終えて
研究グループ報告 ①～④
研究グループ報告 ⑤～⑫
研究グループ報告 ⑬～⑯
第2期 教育実践集中講座 報告
平成29年度公開講演会報告
附属学校園この1年2017
(附属幼稚園・附属幼稚園高松園舎)
附属学校園この1年2017
(附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中)
平成29年度 センター協議会
寄贈図書
附属学校園この1年2017
(附属特別支援)

本校は、平成25年度より文部科学省研究開発学校、そして本年度より教育課程特例校の指定を受け、テーマを「分かち合い、共に未来を創造する子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。「分かち合い」とは、学習の主体としての子どもが、自らをメタ認知しながら、共に生きていく他者と互いの見方・考え方に共感し、認め合うことであり、その過程で、共に学ぶ価値を実感していくと考えています。つまり、なりたい自分を心に描き、自分にとっての問題を認識し、仲間と共に試行錯誤しながら積極的に問題を解決していこうとする中で、自信をもち、主体的に「ひと・もの・こと」に働きかけることだといえます。

そこに向かうために必要な資質・能力として、以下の3つの力を設定し研究を進めてきました。

- 夢や憧れをもち、自律的に **学び続ける力** ○「ひと・もの・こと」へ共感的・協同的に **関わる力**
○問題を解決し、知や価値を **創造する力**

上記のような資質・能力を養うために、カリキュラムを「見方・考え方を育む教科学習」と「生き方・在り方を深化する創造活動」の2領域から構想しました。また、2領域で資質・能力を育むために、子どもたちが主体的に学ぶことができる授業の在り方を検討し、3つの授業づくりの「しかけ」（志向・共感や協同・有用）を中心とした教師の支援の在り方も検討してきました。

初等教育研究発表会では、このような新カリキュラムに基づき、これからの社会を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を考え、目指す子ども像に向かう授業づくりについて提案することによって、教員の教育観・指導観が変容し、子どもやその事実に対する謙虚さや、授業に対する誠実さを学ぶ契機となりました。



主体的、共感・協同的、創造的に学ぶ子どもたち

今後も、子ども主体の研究実践を基盤にしながら、新しいカリキュラムの創造に取り組んでまいります。

研究主題

学びに熱中する子どもの育成（2年次）

－学習意欲を育て、他者と協働しながら考え続ける力を育む授業づくり－

1 研究会の概要

平成30年1月25日（木）・26日（金）に、第100回教育研究発表会を開催いたしました。各教科および道徳の時間、合わせて18本の授業を公開しました。また1日目は、本校の卒業生であり、東京大学大学院特任准教授の松尾豊先生より、「人工知能は人間を超えるか」と題して、記念講演をいただきました。2日目は、京都女子大学の水戸部修治先生、香川大学の七條正典先生、坂井聡先生、岡田涼先生より、各専門分野から今求められる授業づくりについてのご講演をいただきました。その後は、第2学年国語科の全体授業を基に、「学びに熱中する子どもの育成」について、活発な話し合いが行われました。



「学びに熱中する子どもの育成」について語り合う

2 研究主題について

平成29年3月に公示された新学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の必要性が示されました。本校では、生涯にわたって主体的に学び続けることができるよう、学習意欲を育てることに主眼を置き、子どもたちの問題意識を大切にした単元や題材の構成を工夫してきました。また、子どもたち一人一人が学び方を学び、自らの力、あるいは他者と対話しながら課題解決に向かうことができるよう、学習意欲への働きかけを開発してきました。



全体授業（2年・国語科）

3 成果と今後の方向性

ご参会の方々より、「知識・技能の確実な定着や協働的な学びによって学習意欲を育てることを大切にしたい授業づくりが求められている」「子どもの実態に応じた働きかけを行うことに難しさを感じている。子どもどうしの交流の場、振り返りの場を充実させることが大切である」等、次年度研究に向けたご示唆も多くいただくことができました。今後は、個の特性や発達段階を考慮しつつ、自己を見つめる力を高めていくことで、より主体的に課題解決に取り組む子どもを育てていけるよう、研究を深めていきたいと考えています。

研究開発課題

これからの時代に必要な資質・能力「コミュニケーション能力」「創造的思考力」を育成するための新領域「創造表現活動」を設置し、表現に関する教育の充実を目指した教育課程の研究開発

本校は、文部科学省から4年間の研究開発学校指定（平成27年～平成31年3月）を受け、これからの時代に求められるコミュニケーション能力、創造的思考力を育成する創造表現活動を創設したカリキュラムを開発しました。創造表現活動は、相手意識をもったよりよい表現を追求する『プラム』と、自己の生き方・在り方を問い直し、価値の更新につなげる『人間道徳』で構成しています。

プラムでは、チームで対話を繰り返しながら、設定された表現課題に取り組んでいきます。表現課題は、映像制作や演劇、模擬裁判、シンポジウムなど様々です。活動に没頭し、何度も練り直ししながら表現を追求していく生徒たちの姿がたくさん見られたことは、今年度の大きな成果と言えます。

人間道徳では、プロジェクトの成功に向け、チーム学年団で活動を進めていきます。ただ活動をするだけでなく、「自分とは何だろうか？」や「人はなぜ働くのか？（2年団）」、「どうすれば周り（地域や社会）のみんなが笑顔になれるのか？（3年団）」等の大きな問いを考えてきました。そして自分はこれからどう生きるのか、どうあるべきかを考えていきました。



人間道徳1年「ありがとうプロジェクト」



プラム2年「人の心を動かす映像制作Ⅰ」



人間道徳3年「笑カンパニープロジェクト」

研究主題

「学ぶこと」と「生きること」をつなぐ「ものがたり」
－主体×主体の関係が生み出す深い学びをめざして－

本校では、「自立した学習者の育成」をめざし、生涯にわたって学び続ける意欲やその基盤となる力の育成を中心に実践研究を継続してきた。今期は下記のこと重点を置き、「主体×主体の関係」が生み出す深い学びをめざし、学ぶ意欲を育み、自己形成を促していくことができるカリキュラムの開発と教師のかかわり方を追究している。

- ・深い学びを生み出すための問いのあり方
- ・聴き手を育てる教師のかかわり方

（1）深い学びを生み出すための問い

- ・全員を学びに引き込む問い
- ・全員が対話に参加できる問い
- ・学びをさらに深めるための問い

（2）聴き手を育てる教師のかかわり方

対話を深め、深い学びを生み出すために「応じる」ことができる聴き手の育成が必要であると考えた。聴き手は、語り手の意見を取り入れるほど、深い学びを生み出しやすくなる。「応じる」ことは、そのための手段である。

「応じる」とは、「相手に意識を向けて、深く理解しようとする」ことを目的とした『反応』・『確認』・『問いかけ』のことである（図1）。



主体×主体の関係での学び



図1 「応じる」

センター長あいさつ
平成30年度教職センター事業計画「インタビュー」
研究グループ報告①②④
「特集」第18回学部・附属学校園教員合同研究会を終えて
研究グループ報告⑤⑫
研究グループ報告⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳
第2期教育実践集中講座報告
平成29年度公開講演会報告
附属学校園この1年2017（附属幼・附属幼高松園舎）
附属学校園この1年2017（附属高松小・附属坂出小）
平成29年度センター協議会報告
附属学校園この1年2017（附属特別支援）
寄贈図書

研究主題 特別支援教育における協働的な学びを支援する授業づくり

本校では、知的障害のある児童生徒の協働的な学びを促すための授業づくりはどうあるべきか？という問題意識のもと2年間実践研究を進めてきました。知的障害のある児童生徒のコミュニケーションスキルや社会性の獲得状況は多様であるため、個々の協働に関わる実態を的確に捉えて支援する必要があります。そこで、本研究では、協働的な学びを「五つの活動要素」として整理し、指導者の共通理解のもと児童生徒個々に適した協働場面を検討しました。そして、協働場面において、児童生徒が各授業の目標を達成できているかを見取るために個別の評価規準を設定し、複数の指導者でビデオを使用して評価を行いました。その評価結果を根拠に支援改善を考え、次の授業に生かすようにしました。

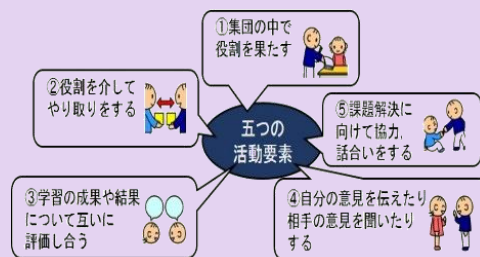


図1 五つの活動要素

研究成果として、授業づくりにおける目標設定、評価から支援改善までのプロセスを明確にすることができ、協働場面における有効な支援方法を三つの観点で整理することができました。

本研究の成果は、2月3日（土）に実施した第19回教育研究発表会で、全国から参加した249名の教育関係者に発信することができました。



図2 教育研究発表会での授業

平成29年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

第91回国立大学教育実践研究関連センター協議会は、平成29年9月15日（金）に島根県松江市にあるくにびきメッセ（島根県立産業交流会館）を会場として開催されました。開会では、東原会長より挨拶があり、その後、前回の議事録確認、各部門会議からの報告、会計に係る報告、2017年度事業の中間報告がありました。

午前11時から「今後のセンターの役割について」のテーマのもと、3名の先生方から話題提供がなされました。まず、教育実践の視点では、豊田先生（和歌山大学）より、学部の教育実習を学部内委員会に戻し、教職大学院において小規模校の研究支援を必修化したり、必修科目として「ICT活用と指導技術」をQ1で開設し以後の活用に向けた操作法を習得させたりする取り組みについて紹介されました。次に教育臨床の視点では、小林先生（東京学芸大学）より、教育臨床部門の衰退化が著しく、今後は情報共有・情報交換・情報発信の強化とミッションの再定義の必要性が望まれるとのお話がありました。また、教育工学の視点では、村松先生（信州大学）より、信州大学に設置された新たな「学びセンター」について紹介されました。

昼食をはさみ午後からは、午前に話題提供をいただいた3名の先生方への質疑応答とともに、「今後のセンターの役割」と題し、各センターから現状や変化、今後の課題などについて報告がなされました。

閉会後に部門会議が開催されました。教育工学・情報教育部門では、各センターより教育工学・情報教育に関して、教員養成/教員研修におけるセンターの役割・機能について、情報交換が行われました。（文責：松下幸司）

第92回国立大学教育実践研究関連センター協議会は、平成30年2月16日（金）に東京学芸大学を会場として開催されました。開会では、東原会長の挨拶、出口東京学芸大学学長の挨拶があり、その後、前回の議事録確認、各部門会議からの報告、会計に係る報告がありました。規約に係る案件では、各大学センター教員の削減等の実情を踏まえ、平成30年度より、かつてセンターに所属していた教員を個人会員として迎えることが提案され了承されました。

午後からは、東北大学大学院教授の堀田龍也氏の講演がありました。メインタイトルに「教員養成大学及びセンター協議会への期待」と掲げられ、氏の専門分野である「教育の情報化」の観点から、中教審等での改革の現状が示され、そこを踏まえての教員養成や教育現場への貢献課題について話しがなされました。ICTやAIに係る教育改革は目覚ましく、それらへの対応が急務であることが示されました。講演後、各センターの情報交流が行われました。各大学のセンターは、学部・大学院等の改革の中で、人員削減が進められ、大学における位置づけや職務内容が大きく変化していることが明らかになりました。今後まずは、各大学におけるセンターの位置づけや職務内容を類型化する必要が確認され、協議会として早急に取り組むことになりました。

閉会後に部門会議が開催されました。教育実践・教師教育部門では、前回と同様、「教員育成指標」に係る現状報告や情報交流が行われました。（文責：山岸知幸）

寄贈図書 (2017/09/01~2018/04/20)

札幌学院大学 心理臨床センター紀要 第17号 2017年 7月	札幌学院大学心理臨床センター
ルーテル学院大学大学院 臨床心理相談センター紀要 2017 Vol. 10	ルーテル学院大学大学院 臨床心理相談センター
島根大学教育臨床総合研究 2017 Vol. 16	島根大学教育学部附属教育支援センター
埼玉大学教育学部附属 教育実践総合センター 紀要 NO. 16 2017	埼玉大学教育学部 附属教育実践総合センター
富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 第12号 平成29年12月	富山大学人間発達科学部 附属人間発達科学研究実践総合センター
東京大学海洋アライアンス 海洋教育促進研究センター 年報 2014、2015年度 (合併号)	東京大学海洋アライアンス 海洋教育促進研究センター
大阪大谷大学 教職教育センター紀要 第 9 号 2017年12月	大阪大谷大学教職教育センター
鳴門教育大学 学校教育研究紀要 No. 32	鳴門教育大学 地域連携センター
群馬大学 教育実践研究 第35号 2018年 1月	群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター
佐賀大学教育実践研究 第35号 2017	佐賀大学教育学部 附属教育実践総合センター
横浜国立大学大学院 教育学研究科 教育相談・支援総合センター研究論集 第17号 2017年	国立大学法人 横浜国立大学
パイディア 滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 Vol. 26 2018	滋賀大学教育学部 附属教育実践総合センター
花園大学 心理カウンセリングセンター研究紀要 【第12号】 2018	花園大学 心理カウンセリングセンター
独立行政法人教職員支援機構 平成29年度教員の資質向上のための 研修プログラム開発支援事業B 次世代型研修プログラム開発事業 報告書 学校の教育力アップのための「学校教育における現代的課題に対応 した研修カリキュラム」の開発 学校力アップ・サポートセミナー 平成30年 3月	埼玉大学教育学部 附属教育実践総合センター さいたま市教育委員会
教育実践総合センター研究紀要 第44号 2017年	山口大学教育学部 附属教育実践総合センター
教育実践総合センター研究紀要 第45号 2018年	山口大学教育学 部附属教育実践総合センター
山形大学 教職・教育実践研究 第13号 2018年3月	山形大学教職研究総合センター
中等教育研究紀要 第64号 2017	広島大学附属中・高等学校
中等教育研究開発室年報 第31号 2017年度	広島大学附属中・高等学校 中等教育研究開発室
長崎大学教育学部教育実践研究紀要 第17号 2018年 3月	長崎大学教育学部
探 平成29年度「ちゃぶ台方式」教職研修部事業報告書	山口大学教育学部
広島国際大学心理臨床センター紀要 第16号 2017	広島国際大学心理臨床センター
教育実践研究 第43号 平成30年 3月	金沢大学人間社会学域学校教育学類 附属教育実践支援センター
次世代教員養成センター研究紀要 第 4 号 2018. 3	奈良教育大学 次世代教員養成センター
熊本大学 教育実践研究 第35号 2018	熊本大学教育学部 附属教育実践総合センター
東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要 第14集 2018年 3月	東京学芸大学教育実践研究支援センター
千葉大学教育実践研究 第21号 平成30年 3月	千葉大学教育学部 附属教員養成開発センター
日本女子大学教職教育開発センター 年報 2016年度 第 3 号	日本女子大学教職教育開発センター
日本女子大学教職教育開発センター 年報 2017年度 第 4 号	日本女子大学教職教育開発センター
佐賀大学教育実践研究 第36号 2018	佐賀大学教育学部 附属教育実践総合センター
研究紀要 第45号 平成30年	広島県立教育センター

センター長あいさつ
平成30年度教職センター事業計画
「センター」
新センター長に訊いてみた。

【特集】
第18回学部・附属学校園
教員合同研究会を終えて
研究グループ報告 ①④

研究グループ報告 ⑤⑫

研究グループ報告 ⑬⑳

第2期教育実践集中講座 報告
平成29年度公開講演会 報告
附属学校園 この1年2017
(附属幼・附属幼稚園)

附属学校園 この1年2017
(附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中)

附属学校園 この1年2017
(附属特別支援)
平成29年度センター協議会 報告
寄贈図書

教職支援開発センター活動報告(2017/10/01~2018/04/20)

<平成29年度>

10月17日(火) 第六回 専任会議
 10月20日(金) 教育実践集中講座(第二期1回目)
 10月25日(水) 教育実践ブレ演習 第四回全体指導
 10月28日(土) 平成29年度 かがわ道徳ラボ研修会Ⅲ
 11月8日(水) 教育実践演習第七回全体指導
 11月9日(木) 教育実践集中講座(第二期2回目)
 11月13日(月) 教育実践集中講座(第二期3回目)
 教育実践集中講座(第二期4回目)
 11月15日(水) 教育実践演習 第八回 全体指導
 教育実践集中講座(第二期5回目)
 11月20日(月) 教育実践集中講座(第二期6回目)
 11月21日(火) 第七回 専任会議
 11月24日(金) 教育実践集中講座(第二期7回目)
 12月4日(月) 第三回 編集会議
 12月7日(木) 教育実践集中講座(第二期8回目)
 12月9日(土) 平成29年度 かがわ道徳ラボ研修会Ⅳ
 12月11日(月) 教育実践集中講座(第二期9回目)
 12月13日(水) 教育実践集中講座(第二期10回目)
 12月19日(火) 第八回 専任会議
 12月20日(水) 第四回 編集会議

2018年

1月16日(火) 第九回 専任会議
 1月22日(月) 教育実践集中講座(第二期11回目)
 2月14日(水) 第一回 教職支援推進部門会議
 2月16日(金) 第92回 国立大学教育実践研究関連
 センター協議会
 2月20日(火) 第十回 専任会議
 2月27日(火) 第18回 学部・附属学校園教員合同研究集会
 2月28日(水) 第一回 教育開発推進部門会議
 第一回 実地教育推進部門会議
 3月8日(木) 第二回 運営委員会
 3月13日(火) 第十一回 専任会議

<平成30年度>

4月11日(水) 特別支援教育実践演習全体指導
 4月12日(木) 教育実践演習 第一回全体指導
 4月17日(火) 第一回 専任会議
 4月19日(木) 教育実践演習 第二回全体指導

教育実践総合研究(第37・38号)原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第37号は**平成30年5月31日(木)**原稿受付締切、第38号は**平成30年11月30日(金)**原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究 投稿要領

1 (投稿の要領)

香川大学教育実践総合研究(以下「教育実践総合研究」という。)への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2 (投稿の内容)

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料(研究ノート、研究動向の紹介など)及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

3 (投稿者)

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議(以下、「会議」という。)が特に依頼した者とする。

4 (投稿原稿の提出方法)

投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿2部と、その電子ファイルを会議に提出する。

5 (投稿原稿の長さ)

投稿原稿の長さは、刷り上がり14頁(1頁は21字×42行×2段)以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6 (刷り上がり1頁目の形式)

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属(所在地)、和文要旨(200字)及びキーワード(5語)を含むものとする。

7 (投稿原稿の取り扱い)

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。

査読者については、会議において決定する。

(1) 採 録

(2) 条件つき採録

(3) 返 戻

8 (校 正)

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。

その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則

本要領は、平成16年4月1日から適用する。

附則

本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則

本要領は、平成19年4月1日から施行する。

附則

本要領は、平成27年4月1日から施行する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース
(No. 6)

発行日 平成30年4月20日

代表者 松村 雅文

教職のかゆいところに手が届く。

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター

〒760-8522 香川県高松市幸町1-1

Tel.087-832-1683 Fax.087-832-1689

<http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/>



CEDS_Tel&URL